

第2回初級養成講座 講座概要

第3部 ティスカッション

■日時：平成29年11月12日（日）13時～16時

■場所：富士浅間神社 社務所

■進行役：大高 康正 静岡県富士山世界遺産センター開設準備事務所 学芸課 准教授

メンバー：宍野 史生 富士道第十二世 神道扶桑教 管長

布施 光敏 ふじさんミュージアム 学芸員



■概要

—「静岡県富士山世界遺産センター」は、富士宮市の浅間大社のすぐ南側に12月23日にオープンする。

—富士山は、2013年に世界遺産に登録され、その副題として「信仰の対象と芸術の源泉」と付いており、それを説明する施設となっている。

—入場料が300円で、建物は奇抜なものになっている。富士山を逆さにした逆さ富士をイメージした建物で、目の前に水面に建物が富士山のように映るようになっている。

—開館の記念展として「富士山の曼陀羅」展を行う。富士山の信仰を紹介する曼陀羅がいくつかあり、そちらの複製を今回作らせてもらったもの6点を会場でご披露する展示会になる。

—「富士山巡礼路(須走口登山道、大宮・村山口登山道)の調査」の資料を付けている。平成27年から須走口登山道の調査を静岡県で行っているが、世界遺産センター開館後はセンターで引き継いでいく事になっている。27年度から今年で3年目、来年に報告書が完成する予定である。須走口で色々な資料を拝見したり、お話を伺ったりしている。須走口は宝永噴火の影響を受けて、資料が紛失していることもあるが、非常にたくさんの資料を伝えている所。小山町史で報告はあるが、須走口登山道ということで報告書は今までなかった。今回は「須走口登山道」という事に絞って報告書を出していく。今日お話しいただいた吉田口の御師の話、富士講の話が須走口にもぴったりはまると理解してもらえると思う。ユネスコから要請があつての調査になるが、シンポジウムや展示会もしていく予定。センターのご案内を拝見いただければと思う。

—お二人の講師にお話しいただいた内容の中で、皆様からの質問をもとに、二人の講師の方にお話を聞きながら進めていく。

大高：「神官」と「御師」の違いは？

布施：吉田口の場合、御師=神職という考え方があった。戦国時代から近世初頭にかけて、御師と

いうものは浅間神社を祈願所として宗教儀礼を参詣の登山者に対して行っていた。17世紀半ばの古文書に「神社の番や掃除は神主や禰宜の役目で御師の務めではない」というような記録が残っている。その段階では、御師さんは神主ではなくあくまでも御師だ。修驗的な要素を強く持つという話をしたが、その点から見ると、御師は神職ではなかったという事がうかがえる。江戸時代に入ると、吉田の御師は、富士山の参詣登山者に対して、本山や本陣を持たない独自の形態を取っていたので、何か拠り所が欲しかった中で吉田家、白川家につながるような神職として神道化していく流れに傾いていく。江戸時代後半になると吉田の御師は、ほぼ全て神職の裁許状(免許)をもらうようになる。江戸時代後半は御師=神主の資格を持つという形に変わってきた。神道というような形で自分たちの流れを持っていく一方で、独自の信仰の形態を残すという富士講をうまく取り込みながら信者の拡大を図っていった。

大高：御師を下級神官といわれることがある。下級という言い方が、純粋な意味で言うと、元々位を持って宗教活動をやっていた方ではないという発声があつたりするのでややこしい。宍野半管長は北口浅間と富士宮浅間大社の管主をされていたが、そのあたりの視点から御師の方との違いはあるのか？

宍野：江戸時代と明治では形態が変わっている。江戸時代は神仏習合なので、富士山北口のお祭りにも西念寺さんのご住職も御参列になる。江戸時代には梵鐘の楼門もあったが、廢仏毀釈で仏教的要素をすべて廃仏した。富士山も今の「久須志」は「薬師堂」であった。静岡側から上がる「奥宮」は「大日堂」であった。吉田口からすれば、1合目の鈴原、2合目の御室、3合目の大黒中食堂。鈴原は大日菩薩をお祀りしており、お寺の支配は結構強かったのではないかと思う。明治時代になり、北口は県社、富士宮は国幣中社になる。初代宮司になって、赴任したのが宍野半。江戸時代は、浅間大社とは言わず「駿河国大宮」と呼んでいた。大宮は富士一族4家が別当職になって、御宮をお守りしていた。富士氏の若旦那が官軍と一緒に東京へ行ったが、徳川慶喜公が静岡へ帰ってくると、慶喜公に歯向かって官軍に付いていたため、戻れなくなる。後に麹町区長になった。当時の千代田区麹町には、大名家と京都からの公家の住まいが多く、麹町区長は他の行政区長とは別格だった。レベルの高いお役をいただいたということになる。富士さんの仏教遺跡をすべて廃仏したのが、初代宍野半。大雨の中、断行して仏的な施設をすべて廃仏した。不淨流しと言つて沢へ流した、と記録がある。北口の楼門、正門も全部廃棄した。力わざで神仏判然を行つた。そのあとは完全に神社にする。きちつとした神職が必要だということになる。その時に県社、官幣社に関しては別に神職規定があるが、そうじゃない所に関しては教導職という形で神職の免許を出していた。今も私たちの所では教導職免許を出すシステムをしている。

大高：祈祷と祝詞の違いはどういうものか？扶桑教の中で使い分けをするか？

宍野：江戸時代の富士講は仏教色が強いので、拝みも仏教色が強い。明治に完全に神道に変えて、扶桑教を作り上げる。御祭神が「浅間大菩薩」だったのが、天之御中主神(あめのみなかぬしおのかみ)・高神産靈神(たかみむすびのかみ)・神皇産神(かみむすびのかみ)にスライドさせて同一にさせないと勅裁を受けられなかつた。お祭りの時は衣冠单(いかんひとえ)の姿で祝詞をあげる。御山に登る時には白装束に変わる。この鈴を持ち、古い先達はお数珠をかける。祝詞は、「かけまくもあやめかしこく…」ということになるが、御山へ上がっての拝みは鈴を鳴らしながらの「六根清浄」になる。「懺悔懺悔 六根清浄 古御嶽石尊 大權現 大天狗小天狗…」というのは拝み、仏である。それはそれで使い分け、古い形を残すように

している。横浜の三浦から西は東口から登った。「六根清浄」も、三浦、横須賀の方は、お念仏系。江戸の方は、木遣り系である。

大高：祈祷と祝詞の違いについての質問だった。祝詞は「神にささげる言葉」、御祈祷は「神仏に對して願い事をする」という風に捉えたらいいと思う。

富士講の信者が今どのくらいいるのか？という質問。扶桑教では把握されているのか

宍野：純粹な講社を名乗っているところは13から14位。あと、私ども教団組織、教会所組織になっているが、そのチームで上がってくものもあるので、それを含めるとまた違ってくる。御水講、中野の十七夜講、萬福講などがある。山三講、山包講、山真講の3つは食行様のお弟子だったという自負があり、江戸富士講の大元だと言う場合もある。ここから枝分かれして一番多い時に400講あったと言われているが、今は大変数が減っている。

大高：富士講のイメージは関東のイメージがあるが、大阪や関西方面にも信者さんがいるのか？

宍野：全国にいるが、講社を名乗るのは少ない。教会、教会所、布教所と言って明治以降の組織を名乗っている。宍野が薩摩（鹿児島）から京都の平田学校で勉強し、有栖川宮様の大殿下と一緒に江戸に入り、日本で初めての宗教省である教務省の役人になる。その役人の役として、駿河国大宮の初代宮司として来る。北口や周辺の富士山に関する神社を全部包括して社司を兼務する。北口も元々は「富士嶽神社」という名前だった。宗教改革、革命が起こった一つの原因を作った一人である。宍野の出身地ゆかりの教会からも多い。

大高：関東地方からは吉田口から登られる富士講の方が多かった。関西方面から来る人は東海道を通ると富士宮口から登るのが一番近い。富士宮の登山口を管理していたのは京都の聖護院という山伏のお寺。その関係の村山修験の富士山興法寺というお寺があった。その系統の御師と同じような活動をしていた山伏の活動拠点の旦那場が関西に多い。近代講になると神仏分離があり村山との関係はなくなるが、江戸時代は富士宮の修験道の旦那場が関西に多くあって、その影響もあって三重県には富士講と名乗っているが江戸の富士講とは違う富士講がまだ残っている。

富士山に登る時、毎年お参りをされているが、何時頃から登って、山頂に何時頃着くのか？

宍野：今は五合目までバスで上がる。私は、違う日に御山に入る前に高尾の蛇滝で滝行を行う。蛇滝から登ると30分位で薬王院に上がる。昔は薬王院で参籠して、翌朝御頂上にお祀りしてある浅間様をお参りし、尾根伝いに小仏山の山頂に行く。朝7:30位にそこの見晴らし茶屋から下りると11時位に相模湖の弁天橋に着く。大月へでて吉田に入る。今は、大国屋に泊まる。昔は堀端屋（小佐野家）に泊まっていた。ただ、ついこの前までは御神寶（みかんざね）だけは小佐野家のご神前に奉納していた。他の人たちは他へ分泊していた、という記録がある。小佐野さんがクローズしてからはそのまま大国屋に入る。今はバスで東京から出たら人穴に行く。角行様が御行した人穴で拝みをあげて、北口にお参りをし、元祠へお参りし、大国屋へ泊り、翌日朝3時北口を出て、歩いて2時間で馬返し、3時間で5合目。そして佐藤小屋に出る。若い人は古御嶽へお札をもらいに行く。その時に金剛杖のキャップを出してくれていた、という。それを付けてもらい登る。昼頃8合目に到着。そこで一泊し、翌日御頂上。その日のうちに下りる。最低8日かかると江戸時代の記録にある。キャップは下りる時は、下を付いていた方に付け替え、それを上にして担いで帰る。担いで帰って、帰ったら子供たちをむしろに寝かせていて、その前でキャップを外して神様のお肌に付いたところで子供たちの背中を付いて帰った。そうすると子供たちが元気に過ごせる、ということ。

だいたい2日間と聞いている。

布施：御師の宿泊の形態を見てみると、人数にもよるし、健脚な方そうでない方によっても違う。

3時～4時に起きて遅くとも5時に登る。朝食を取って登る講社は7時～8時に出て、神社まで20～30分かけて参拝し、ゆっくり歩き2時間から2.5時間、10時前後に馬返しに着く。

3合目でお昼を取る、というパターンもある。それで中食堂という。見晴らしのいい所でご飯を食べて、3時間歩いて5合目、6合目に2時～3時。江戸時代だと古御嶽は時間がかかる。古御嶽に行くと時間がかかるので、泉ヶ滝から6合目にショートカットとする道が「古御嶽道」という形で生まれて、そうすると経ヶ岳に参拝できない…という事も書かれていたようだ。そこから登り始めて夕刻までには7合目8合目の小屋に宿泊して、翌朝早朝暗いうちに山頂を目指して登って頂上で参拝する。

大高：今日展示している須走の御師の方のお弁当箱があるが、吉田の戸川家のお弁当箱については知っている？中身は何を入れたか分かる？

布施：江戸時代は御師さんのお餅みたいなもの、お米でぎり飯を作り、ふきを煮た佃煮みたいなものなど非常に質素なものだったようだ。

宍野：今は無いが、すあまを持たされた。山のお昼は早いと言われる。剛力を7人分で1人つける。

搔巻（かいまき）7つ、お弁当7人分、草鞋1人5～6足で計30足くらいを持ってもらう剛力を江戸富士講は必ず雇った。その剛力が「先達、もう昼だから弁当だ、弁当だ！」と言う。自分の荷物を軽くしたいから、昼でもないのに早くお昼を食べようと言って弁当箱を軽くさせたという笑い話もある。弁当にまつわる話、「弁当忘れても雨具は忘れるな」とよく言われたことだ。山だけは、下はカンカン照りでも山は分からない、ということ。

大高：外川家には講の名前が入っているものがあるが、須走米山家にもあるか？

米山：残念ながら、食器類はなかった。

大高：吉田の御師の話をしてもらったが、須走の御師と吉田の御師の交流は具体的にあるか？

布施：河口の方からお嫁さんをもらったり、向こうに嫁いだり、御師の家筋との関係で縁戚関係を結ぶというのは結構あったようだ。吉田の中でも御師同士で婚姻関係を結び、道者さんがたくさん来た時には助け合ったようだ。江戸時代の資料を見ると、須走にも吉田に通ずるような名前もあったりするので、関わりがあるかもしれない。

大高：須走は、駿河と甲斐と相模の国境近くにあって、物流を取り扱う人が元々山梨との間にいたという指摘があるので、どこか繋がっているのかもしれない。米山さんご存知か？

米山：曾祖母が吉田から来ていた。下吉田に親族があった。須走の氏で、渡辺、高村、外川、佐藤という方も須走にもいる。

大高：御師の檀家まわりの話を頂いたが、お客さんの取り合いというのはあったのか？

布施：江戸時代の段階では、登山改め役所があり、どこでお世話になるかという取り調べをする。一般のお客さんが来た時には、改め役所で均等に割り振って、いざこざが起きないようにしていたと考えられている。

大高：須走の方でも御師が17件と発展する時期があるが、御師の方だけで泊めきれないときにはそれ以外の一般のお宅や神社・お寺に割り振りをしている。改め役所みたいなところで割り振りが行われていたのではないかと思う。それについては、また報告書の中でまとめて頂けると思う。